

4400371

Death—Educationのための具体的方略の実践・評価
(その2)

課題番号 16592136

平成16年度—18年度

科学研究費補助金〔基盤 C〕研究成果報告書

平成19年5月

研究代表 岡田洋子
(旭川医科大学医学部教授)

【目 次】

はしがき	1
I. はじめに	4
II. 研究経過と問題の所在	4
III. 方法	6
IV. 結果	7
1. 「いのちの授業」での学び	7
2. ビデオ視聴後の記述内容の分析結果	9
3. フリーディスカッション	20
V. 考察	21
1. 小学校6年生のビデオ視聴の記述内容からみた特徴	21
2. 知識と体験学習のバランス（同化と調節）	23
3. カリキュラム全体における単元「いのちの授業」 の位置づけ・意義	24
4. 生と死について学ぶ教育・社会の構築	24
VI. 終わりに	25
VII. 参考文献	26
表	27

はしがき

研究組織

研究代表者	:	岡田 洋子	(旭川医科大学医学部)
研究分担者	:	菅野予史季	(旭川医科大学医学部)
		荃津 智子	(天使大学看護栄養学部)
		井上由紀子	(日本赤十字北海道看護大学)
研究協力者	:	井上ひとみ	(前石川県立看護大学)
		大野 睦仁	(札幌市厚別通小学校教諭)

研究経費

平成 16 年度	1, 170 千円
平成 17 年度	900 千円
平成 18 年度	1, 400 千円

研究発表(雑誌および学会発表)

- 1) 岡田洋子、菅野予史季、荃津智子、井上ひとみ：Death Education のための指針
および具体的方略の開発と実践・評価 —小・中学生を対象とした—
平成 13-15 年度科学研究補助金 [基盤研究(C)(2)]、研究報告書 2004
年 3 月
- 2) 荃津智子、岡田洋子、井上由紀子：小学 5 年生を対象とした Death-Education の実
践・評価と課題、天使大学紀要、vol.5、1-12、2005
- 3) 岡田洋子：「失われしもの」—子どもからのメッセージ—、旭川精神衛生、79 号、
40-43、2005

- 4) 井上ひとみ、岡田洋子他：小学生を対象としたDeath-Educationの実践・評価
—小学2年生の記述内容の前後比較より—、Ishikawa Journal of
Nursing、3(1)、65-75、2005
- 5) 宮川妃佐子、岡田洋子、菅野予史季、志賀加奈子、荃津智子、井上由紀子、
井上ひとみ：Death-Educationの実践・評価、第20回日本小児がん
学会、第41巻、第3号、P580、2004
- 6) 荃津智子、岡田洋子、菅野予史季、志賀加奈子、井上ひとみ、宮川妃佐子、
井上由紀子：小・中学生を対象としたDeath-Educationの実践・評価、
第51回日本小児保健学会講演集、364-365、2004
- 7) 井上由紀子、岡田洋子、菅野予史季、荃津智子、井上ひとみ、宮川妃佐子、
志賀加奈子：Death-Educationの実践・評価—小学生を対象として—
第51回日本小児保健学会講演集、362-363、2004
- 8) 高儀郁美、岡田洋子：がん患者を在宅で看取った家族の体験、第12回日本家族看護
学会、P63、2005

研究成果(著書)

- 全執筆者21名、岡田洋子：3章4節：終末期にある子どもと家族への看護、中野綾美
編、小児看護学 小児の発達と看護、209-223、MCメデ
イカ出版、2006
- 全執筆者18名、岡田洋子：第2部Ⅲ.子どもの死、中西睦子監修、小児看護学、128
-138、エイド出版、2006
- 全執筆者22名、岡田洋子：第I章. 3.子どもの死に対する理解と反応、Pp14-28、
及川郁子監修、田原幸子編著、予後不良な子どもの看護
メヂカルフレンド社、2005

研究発表(予定)

- 1) 井上由紀子他、Death-Education の実践・評価 —小学6年生を対象として—
第27回日本看護科学学会、2007年12月
- 2) 菅野予史季他、小児期の生活体験と Death-Education —ディスカッションの
導入と実践・評価—、第56回日本小児保健学会、2008
- 3) 大野睦仁、荃津智子他、生活体験の変化と学校教育における Death-Education
の意義、第54回日本学校保健学会、2007年

I. はじめに

我々は先行研究をベースに、子どもの死の概念発達と生活体験について研究に取り組んできた。その結果、身近な人やペットとの死別体験、葬式・お通夜・お墓参りといったセレモニーへの参加は、10年前と比較して減少していなかった。日常生活を通して、家族と死について話すことは少なく、なるべく話したくないと思っている生徒が全体の6割であった。研究を通して、以下の課題が明らかとなった。

- 1) 死をタブー視し、子どもとの会話を避けている「大人社会」の存在
- 2) 死について学ぶ社会を構築していく必要性
- 3) 死別体験をどのような「体験」として行動シエマ（ピアジェの認知発達）にとり込んでいるかに関する「質的研究」の必要性

以上の3点である。子どもを取り巻く現代社会は、テレビやビデオを通じたバーチャルな死との出会いが、死の実体験より先行して子どもの日常生活に入り込んでいる。このような社会環境の中で育つ子どもが、どのような「死の概念」、ひいては「生命の大切さ」を体得していくのか、大きな関心をもって研究に取り組んできた。

アメリカではすでに死への準備教育が幼児・小学校教育で実施されている。日本においても Death Education の必要性が認識されつつある。

II. 研究経過と問題の所在

凶悪犯罪の低年齢化といった社会問題と相俟って、小学生から中学生へと学年が上がるにつれ「人間は死んでも生き返る」と死を可逆的に捉える、あるいは「わからない」と答える生徒が増加傾向を示した。死の概念発達・死の理解に変化・混乱が生じていることが、先行研究の結果から示唆された。そのため平成17年度-18年度はさらに協力校を開拓し、これまでの Death-Education に対話を取り入れ方略の充実を図ること、死を可逆的にとらえる傾向とその背景の検討を目標とし、研究の継続を決めた。

しかし、小中学生による凶悪犯罪が続くといった社会問題化する中、Death-Education の実施に向かって準備をすすめても、引き受けてくださる実施協力校がなかなか得られず時間を要した。そんな中、小学生によって引き起こされる凶悪犯罪、さらに凶悪犯罪の低年齢化が、社会を震かんとさせた。小学校高学年から中学生で増加傾向がみられる「生き返り」を信じるかに見られる子ども達に、社会の注目と関心が向けられた。

そこで17年度は特に中学生に着目、「死の不可逆性」の理解と影響要因について、過去の研究データを含め分析を行なった。その結果、Death-Education を通して命の大切さを再発見するとともに、個としての命の存在から他者との関係性、さらに命の複雑さへと広

がりが確認された。この時期は、自分は何のために生きているのか、生きるとは・・・、人間とは・・・等々、人間存在に関する根源的な問いに対して自問自答する「第2の誕生期」と言われる時期である。

これらの問いに自分なりの答えが見出せず、反対に死の概念発達において「混乱」をきたしている小学校高学年から中学生の姿が推測された。

18年度は引き続き死の不可逆性に着目しつつ、小学1年生から中学生にDeath-Educationを実施・評価するとともに、Death-Education実施後に生徒と直接感想を語ったり死について語り合う機会を持ち、その機会を推進させていきたいと考えた。

18年度計画修正事項：

- 1) Death-Education実施は小学校6年生を対象に行なう。
- 2) 教材は、難治性の心臓疾患と闘いながら、大好きな学校へ死の間際まで登校し友達との生活を生きた、同年代の小学6年生のドキュメンタリー番組である。
- 3) ドキュメンタリーを見た後、「命について」「生きること」について、今思うことをレポートに記載し、提出する。
- 4) その後、同年代の子どもの死因の第2位が自殺、生きたくても生きられないで死んでいく同年代の姿をみて、「命について」「生きること」について、フリーディスカッションの機会をつくる。
 - ・生徒主体に進行可能か(円滑にディスカッションに入れるよう、テーマを提示し導入を図る)。
 - ・ビデオあるいは録音が可能か(録音可で、各クラスにデッキを1台よういする)
- 5) 同年代に生き返りを信じる友がいるが、皆さんはどのように思いますか？

平成18年秋になりS市のA小学校から協力の意向が得られ、ようやく本格的なDeath-Educationに着手できた。A小学校は6学年を対象に、単元「いのちの授業」(計36時間)を独自に展開、いのちの大切さ・Death-Educationに取り組み始めている学校である。単元は9テーマから構成されている(表1-1・表1-2)。打ち合わせの結果、私達は8番目のテーマ：「死」は「生きる」ことを考えること、の時間を担当することになった。

テーマ「死」は「生きる」こと、を考えるために、難病の心疾患と闘いながら、最後まで希望を失わず、大好きなクラスメートと大好きな学校で過ごすことを望み、その時間を一生懸命生き、クラスメートにはもちろんのこと、周囲の者にも多くのことを与え亡くなっていった、同年代の小学6年生たかし君のドキュメンタリーを、教材として用いた。1日2時間、2日間で計4時間の担当する。

Ⅲ.方法

1. **対象**：6 学年 3 クラス、合計 99 名である。
2. **方法**：1 日目：
 - 1) Death-Education 実施前に、これまでの授業や学習を振り返り、印象に残った学習内容や感想をレポート提出する。
 - 2) 教材「天国のたかし君、奇跡をありがとう」のビデオ鑑賞。
 - 3) ビデオを見て思ったことや考えたこと、感想をレポート提出する。2 日目：
 - 4) 各クラス毎に「天国のたかし君、奇跡をありがとう」のビデオを見て思ったことや考えたこと、感想、命・死・生についてレポートに記載するとともに、学んだこと、思うことをディスカッションする。
 - 5) ディスカッションの導入は、クラス担任の協力を得て、話し合いのきっかけ・導入として以下に述べる 3 つのテーマをもとに、各クラスで話し合いの機会を持った。ビデオで見たように、生きるために病気と闘い頑張っていた、皆さん達と同じ 6 年生のたかし君が、亡くなった。(1) たかし君のビデオから学んだこと、(2) たかし君の人生は、悔いがあったか、(3) どうしてたかし君はあれほどに、人の役に立ちたいと思ったのか、の 3 点である。
3. **分析方法**：ビデオ鑑賞の前後に書いたレポートを逐語録とした帰納的・記述的方法である。
4. **倫理的配慮**：先生方と打ち合わせを重ねた結果、小学生は前述した通り道徳教育の一環として、先生方の協力を得て実施した。特に、身近なあるいは大切な人の死に出会って間もない生徒の有無といった個別的情况に対して、実施前後で個別的配慮を依頼した。

IV. 結果

1. 「いのちの授業」での学び

(小学校6年生がこれまでの学習を通して感じたこと・学んだこととして、ビデオ視聴前に記述した内容)

- 1) 命：命の授業をとおして多くの生徒が、命を一つしかない大切なものと述べている。また、命はとてももろく壊れやすいもので、いのちは亡くなるのはすぐだけど悲しみは長く続く。命は命から生まれその命が命をなくす、と表現している。また命の授業で命についてたくさん学習し、命の重みがわかったがどれも死につながっていると生の対極に存在する「死」を理解している。
- 2) 死：多くの生徒が、命の授業をやってきて今まで考えたことがない「死」について考えるようになったと、自分の変化を述べている。「死というものは生き物が自然になるもの」と、命あるもの全てに死が存在する「死の普遍性」に言及している。さらに「こわい」と思っていたが死が、エルマおばあさんの本を読んで、死とは「別の世界に行くこと」、その別な世界とはきっと人の心の中に・・・と、あるいはエルマおばあさんの本の中で、「体が天国へ行く準備をしている・・・」とう表現箇所があり、心に残ったと述べている。死を恐れながらも、それに対する納得のいく説明・解釈を模索していることが推察される。
- 3) 生きる：いのちの授業をとおして、健康に生きていることの幸せをあらためて実感するとともに、これまでの「自己の生き方」に対する見直しの気持ちは述べられている。例えば生きることはいのちをもらうこと、いのちは私を産んでくれた親が居てこそ存在するものと、親に対する感謝の念を再認識している。生きたいと頑張っている人、にもかかわらず生きられないで亡くなっていく人のことを考えるようになって、生き方を考えるようになった。

「いのちの授業」を通して、次のような変化・見直しが生徒達に生じていた。

- (1) 障害者観の変化について、一番心に残っているのは、障害を持っている人のこと、「かわいそう」から「応援」する心境への変化
- (2) これまでの学習で一番心に残り感じていることは、こんなに苦しんでいる人がたくさんいるということ
- (3) 小さい子が生きたくて、そのために頑張っているけど、死んでしまうという悲しい現実があること
- (4) 生きたくても生きられない病気の子ども達を通して、当たり前が当たり前でないことを再認識していること

- (5) あたり前という認識から、幸せな自己の発見・感謝の気持ちへと変化したこと
- (6) 「命」「死」「生きる」ことを学んできた生徒は、殺人や自殺についても自分の考えをしっかり持ち、表現している。
- (7) 生きたくとも生きることができない人がいるのだから、マイナスのことばかり言わないでほしい。もっといろいろな人を見てほしい。そして例え皆にいじめられても、自ら命を絶ってはいけなさと教えた。
- (8) 一つしかない大切ないのちを奪う行為、殺人はどんなことがあってもしてはいけない。
- (9) 生きたくとも生きられない人が頑張っているのに、健康な人が自ら命を絶つことは、生きられない人に対して失礼である。
- (10) 世界に目を向けると、貧しさのために学校に行けず、自分が生きのびるために、あるいは家族を助けるために、労働力としての生活を余儀なくされている同年代の子どもの存在(海外)に、驚く。

4) 今まで考えることがなかったテーマ

生徒は、この「いのちの授業」までは、苦しんでいる子の立場になって考えてみることはできなかつたし、ベタータイムでの学習は、今まで考えていないことについて考えさせるものであった、と述べている。また、いのちの学習を通して、生きたくとも生きられない人のことを考えるようになってから、いつ死が訪れるか分からないので「精一杯生きよう」という考えに変わった、と述べている。さらにこの学習を通して、命だけでなく「生と死」「絆」「いじめ」など、様々な事柄の考えを持つようになったと述べている。

5) レポートの中で生徒が引用等で使用していた教材

- (1)レオ・バスカーリア作、みらい なな訳、葉っぱのフレディ、童話屋、1998
- (2)すずらんの会編、電池が切れるまで、角川書店、2003
- (3)ムービー(ビデオ) ・素平君・司君
・たかし君
- (4)大塚敦子、さよならエルマおばあさん、小学館、2000
- (5)佐野洋子、100万回生きたねこ、講談社、1998
- (6)佐藤律子編、種をまく子供たち、ポプラ社、2001

6) こどもから出された疑問

- (1)なぜ、自殺の前に相談しないのか
- (2)なぜ、同じ人間が殺し合わなければならないのか

- (3)「命」は「命」から生まれ、その「命」が「命」を亡くす
- (4)なぜ、神は平等でないのか

2. ビデオ視聴後の記述内容の分析結果

ビデオ視聴後、子ども達が思ったことや考えたこと、感じたことについて記述した内容を分析した結果、8つのカテゴリーが抽出された。8つのカテゴリーおよび各サブカテゴリーについて以下に記述した。抽出過程は表2～8に示した。

<カテゴリーおよびサブカテゴリー>

- 1) 生き方に感動
 - (1) 生き方のすごさに圧倒
 - (2) 自分より大人の生き方
 - (3) 自分にはかなわない生き方
- 2) 見習いたい生き方
 - (1) モデルとしたい生き方
 - (2) どんな状況でも前向きに生きる姿勢
- 3) 死の理不尽さ
 - (1) 生きたくても生きられない生
 - (2) 命を粗末にすることへの怒り
- 4) 命、生きることへの再確認
- 5) 悔いのない死
- 6) 残された家族・友達の悲しみ
- 7) 支えあう人と人
 - (1) 友達との絆
 - (2) 人との出会いがもたらす希望・勇気
- 8) 生き方を通しての贈りもの

以下に、カテゴリーの特徴を具体的データとあわせて述べる。

カテゴリー1. 生き方に感動

このカテゴリーは、主人公の生き方そのものに感銘し、主人公の生き方が自分よりも遙かに大人であること、また自分が主人公の立場ならそのような生き方はできないといった主人公の生きる姿勢に深く感動した内容が表現されている。サブカテゴリーとして、1) 生き方のすごさに圧倒、2) 自分よりも大人の生き方、3) 自分にはかなわない生き方から構成されている。

1) 生き方のすごさに圧倒

これは、ビデオを通して主人公が病気をもちながらも自分のことではなく他者に目を向

け“人の役に立ちたい”と行動する姿に感銘を受けたことを表現している。子ども達は、主人公の生きる姿勢や行動を具体的に記述しながら「すごい」「感動した」「すばらしい」「強い」という言葉を用いてその感動を表現していた。

具体的表現

「自分からどんどん進んで、人の役に立ちたいと思ってニンジンを送ったりして、とてもえらいなあというより、とてもすごいなあと思った。」

「自分の運命に背を向けずにその上“生きてやる”と考えるのはすごい。たかし君は強くて優しくて驚いた。」

「たかし君の全てに僕は感動した。人形劇をしてたくさんの人を喜ばせたり、さらに折り紙を一人一人にプレゼントしてあげたりする姿に感動した。」

「やってもらってばかりなのでみんなに何かしてあげたいとその優しい気持ちがすごい。」

「自分が病気なのに、自分よりも他のみんなのことを思うなんてすごい。」

「自分にできることを探して行動にしたことがすごい。自分にできることを一生懸命やったことはすごい。希望をあきらめなくて追いつけるたかし君はすごい。」

「生きているだけで人の役に立っているたかし君がすごい。」

「病気でさえも周りをちゃんと見て、考えられているのはすごい。この強さは、たかし君自身の強さ。世界一の強さ。」

「人でもない動物にも自分の力をかしていた。その力がすごいと感動した。」

「たかし君という子の前向きな生き方が、すばらしいなあと思いました。」

「みんなにしてもらうだけじゃなくて、自分も何かしてあげたいという気持ちはすごい。」

「病気で苦しんでいて、でも頑張って生きようとしているところがすごい。」

2) 自分よりも大人の生き方

これは、主人公の考えや行動に感銘すると同時に、主人公の生き方が自分と比較して大人であること、一歩上であることを表現している。また、この内容には「大人になれない」と語った主人公の言葉を受けて表現した記述も含まれる。

具体的表現

「夜にも折り紙を作って、みんなに配っていたたかし君は、私より一つ上の考え。」

「たかし君の考えは、本当に僕よりも1ランク上でした。なぜなら、僕は常に人のことを考えたり、人に喜んでもらいたいともそんなにしないのに、たかし君はそれをいつも考えていた。」

「たかし君のことをみていると命のことをわかっていて私よりも上の考え、大人になっていると思った。」

「たかし君は大人になれないと言っていたけど、もう立派な大人でした。人の役に立っていたし、みんなのことをわかっていたので本当にもう立派な大人です。」

「たかし君は、自分のことを“大人になれない”と言っていた。でもそれは違う。“人の役に立ちたい”と常に思っていて、その考えが大人だからだ。」

「自分とたかし君を比べたら、たかし君はだんぜん大人に見えました。」

「たかし君の考え方は、僕よりも何倍も上の考え方だと思います。僕も人の役に立ちたいと思うときもあるけど、なかなか実現できないし、そういう気持ちをもてなくなることがほとんどだから。」

「やっぱり、病気などで命が残り少なくなっている人は、僕よりも2倍も3倍も命や死について考えているんだなと思いました。」

「心優しい気持ちをもっていて、考えが一つ高いんだなと思いました。」

3) 自分にはかなわない生き方

これは、もしも自分が主人公の立場であつたらどんなことを思い、考え、行動しただろうと想像し、自分だったら「できない」「考えられない」と記述しながら主人公の生き方への感動を表現している。

具体的表現

「もし、自分が病気だったら自分のことで精一杯で他のことなんて、ほとんど考えないでいるような感じだと思います。」

「人の役に立とう！なんて自分だったら考えてみようとしなかったと思う。」

「私もたかし君みたいに病気にかかっても多分、自分のことで精一杯で支えてくれた友達に“何かしてあげる”“役に立ちたい”なんて考えつかないと思う。」

「もし、自分がそういう病気にかかったら、きっと人のことなんて考えずに死にたくないとか視野がせまい考え方になると思う。」

「私がたかし君の立場であつたら、あんな生き方できなかったんじゃないかと思います。」

「僕は、心臓に重い病気があつたら人のことなど考えずに自分を優先してしまう。うつになって人と会うことなんて思わないし、他の学校にわざわざ、こづかいをはたいてニンジンを送ったのがすごいなと思った。」

「もし、自分だったら本当に絶望で、生きることがだんだん辛くなっていくんじゃないかなあと思います。」

「私が心臓の重い病気になったら、絶対に生きることを忘れてしまって希望とかそんなのは考えられなくなると思う。」

「もしも、自分がたかし君だったら、たかし君ほど生きている命を大事にしていらないと思います。多分、支えられ続けているだけで、自分からは何もしてあげられないと思います。」

「もし、自分がこのたかし君状態なら、病気を治すことしか考えていないと思います。」

カテゴリー 2. 見習いたい生き方

このカテゴリーは、主人公の病気をもちながらも人の役に立ちたいと他者へ向かって生きる姿勢や行動から自分もたかし君をモデルとして生きていきたい、また、自分もたかし君と同じように病気になっても、あるいは事故、いじめなど、どんな状況になって夢や希望を失わずに前向きに生きていきたいという思いや意志を表現している。サブカテゴリーとして、1) モデルとしたい生き方、2) どんな状況でも前向きに生きる姿勢で構成されている。

1) モデルとしたい生き方

これは、主人公の病気をもちながらも人の役に立ちたいと他者へ向かって行動する姿、友達や周囲に目を向けて生きていく姿に感動し、「自分もたかし君のように生きていきたい」という気持ちや意志を表現している。

具体的表現

「私もたかし君のように、“人の役に立ちたい” と思っています。」

「僕もたかし君みたいに、常にまわりを考えられなくても考えよう！ということを考えて行動に表したいです。」

「たかし君を見習わなければという気持ちです。希望、目標をもって前向きな生き方で生きていこうと思います。」

「自分のことが大変なのに周りのみんなに対する優しさがすごく大きくて見習わなくてはと思いました。」

「私はたかし君がやったように人の役に立ちたいと思った。どんな事でもいいから役に立とうと思った。」

「たかし君のように希望を捨てずに、人を思いやる人になりたい。夢を捨てないで命を無にしないで、人として生きていきたい。」

「たかし君みたいにねばり強く練習したいと思いました。そして友達も大切にしたいと思いました。僕もみんなから信頼されるようになりたいと思いました。」

「私もたかし君のように生きたい。私もいろんな人のためにできることをやりたいです。まず周りから。相談にのってあげたり、そんな小さな優しさでもいい。それは、きっと相手の心の支えになるから。私は、ささいなことでもやりたいなあと思いました。」

「僕もたかし君のように、友情という面で見習いたいと思いました。」

「ぼくもたかし君のようにコツコツやって夢を叶えたいです。」

2) どんな状況でも前向きに生きる姿勢

これは、主人公が病気をもちながらも最期まで夢や希望を見失わずに常に前向きに生き続けた姿勢から、今後、自分も主人公のような病気、あるいは事故、いじめなど、どのよ

うな状況におかれても前向きに生きていきたいという気持ちや意志を表現している。

具体的表現

「わたしも生きようと思う。いじめにあっても、いじめにあわなくても病気にかからなくても病気にかかっても精一杯、生きようと思う。この先に何があろうと、事故にあおうと、いじめにあおうと私は精一杯生きたい。命がつかれたと思うまで私は生きたい。私も人の役に立ちたい。そのために生きる。」

「僕も前向きで、夢や希望を諦めない人になりたいです。たとえ、病気になっても諦めないで最後まで“生きよう”という気持ちで生き続けたいです。」

「私もたかし君のようになってしまったら、頑張ってる生きようと思わないかもしれないけど、このビデオを見て、もしそうなったら、たかし君のように頑張ってる生きようと思いました。」

「もしも、自分が軽い病気、重い病気にかかったとしたら、たかし君みたく支えられ続けるだけじゃなく、自分からもしてあげることしたいなあと思いました。」

「病気になってもできるんだ。ということもわかりました。私も“人の役に立ちたい”と思いました。私は、いつまで生きられるか全然わからないけど、絶対命を大事に生きていきます。」

「自分も明日、また未来に向かって生きていたいと思います。たとえ、死ぬという病気にかかってしまっても、たかし君みたいに前向きに最後に人の役に立ってみたいです。」

「病気になっても命は簡単にすててはいけない。生きたいという気持ちをもつことで、生きられるんだと思います。」

カテゴリー 3. 死の理不尽さ

このカテゴリーは、主人公が病気をもちながらも“人の役に立ちたい”と自分のできることを見出し、精一杯努力したにもかかわらず、最後は亡くなってしまった死のもつ不条理さや不公平さを表現している。また一方で、社会で起こっている命を粗末にする行為や状況への怒りを表現し、その人達に主人公の生き方を伝えたいという気持ちを表現している。サブカテゴリーとして、1) 生きたくても生きられない生、2) 命を粗末にすることへの怒りで構成されている。

1) 生きたくても生きられない生

これは、主人公が病気をもちながらも“人の役に立ちたい”と他者のために行動し、精一杯生き続けたにもかかわらず、最後は亡くなってしまった死のもつ不条理さや不公平さを表現している。

具体的表現

「あんなに考える人間は、普通の生き方をしている人よりも生きて欲しいと思います。」

「なんで、こんなにいい人がこんなにも早く亡くならなければいけないのか不思議でした。もっと、たくさんの生命をもっていれば、たくさんの人を幸せにできたと思います。」

「たかし君は、何も悪いことしていないのに、なのにどうしてこんな事になるんだろう。神様はいじわるだなと思う。」

「もっと、いいことをしてほしかったけど死んでしまって残念だあと思いました。」

「最後まで、生きようと頑張っているけど生きられなくて、とても残念だと思いました。あと 12 歳で永眠して僕たちと同じ年で死ぬ人もいるんだあと思いました。とてもかわいそうだと思いました。」

「あんなに頑張っていたたかし君に、どうして奇跡は起きてくれなかったのかなと思いました。」

「僕と同じ 6 年生でこの命を終わらせてしまったのか、どうしてそんな病気にかかってしまったのかが不思議です。もしも病気にかかっていなければ、今頃世界中のみんなに元気を与えられたと思います。」

「まだまだ生きていたかったはずなのに、たった 12 年で亡くなるなんてかわいそうすぎる。なんで病気なんて存在するのか、本当に不思議とてもかわいそう。」

2) 命を粗末にすることへの怒り

これは、主人公が生きたくても生きられずに亡くなってしまった一方で、社会では自殺や殺人など意図的に命がなくなる行為や状況に対する怒りを表現している。また、その人達に主人公の生き方を知らせたい気持ちを表現している。

具体的表現

「自殺しようとしている人や、そう思っている人にたかし君のことを伝えたいです。こんなに頑張っていて、こんなに力強く生きていた子がいたんだって知ってもらいたい。私がもらったように、そんな人達にも“希望”と“勇気”をもらってほしい。」

「いじめにあって自殺する人は、生きようと思っていないんだと思う。いじめにあって自殺しようとする人は、命を大切にしていない。もっと命を大切にしてほしい。命は大切なんだって、自殺した天国にいる人にそう言いたい。」

「こんなに素晴らしい人がいるのに、自殺したり殺人をしたりする人はおかしい。もっと、色んな人を見て、正しいことをしてほしいです。」

「この世界で、病気で苦しんでそれでも生きようとしているのに、自殺とかする人は何、と聞きたいです。そんなことをするなら、もっと命のことを考えた方が良いと思う。」

「この世の中には、事件、事故が多いけれど、それはこの世の中に、命について甘く考えている人がいるからだと思う。命について厳しく考えている人が多くなれば事件や事故は、すごく減ると思われる。」

「最近、自殺などが多いが、生きる勇気を与えることによって、その自殺をする人を一

人でも減らせるのではないかと僕は思っています。」

「人を支え、そして支えられる。これが本当の人間だと思います。自殺するときや、人をいじめたり、人を殺すときに、少しでもたかし君や生きていたくても生きられない人のことを思いだしてあげてほしいと思いました。」

「たかし君は、みんなに勇気づけて、そして自分も勇気づけられて、どんどん成長していったのだから、世界中でもし、いじめや自殺をしたいと思っている人やリストカットとかで、今自分で生きるって思っている人に、そういうことをすると自分に傷が残り、後悔するだけと言いたいです。せっかくお父さんやお母さんが頑張って、産んでくれたのだから最後まで、感謝しなくてはいけないのだから、生きるという気持ち、命を大切にしてほしいと思いました。生きてくても生きられない人だっているのだから、命にありがとって、言ってあげなければならない。」

「自殺する人は本当にバカだ。生きていたい人が死んでしまうことを本当にかわいそうだと思うなら絶対に自殺なんてしない。」

カテゴリ 4. 命、生きることの再確認

このカテゴリは、主人公の生き方を通して、あらためて命や生きることの大切さを再確認した内容が表現されている。

具体的表現

「生きていて、役に立たないことはないと思いました。」

「人の役に立とうと思うのではなく、生きていてだけで人の役に立てるのだということを私はこの勉強をして思った。たかし君の言うとおりに思う。」

「やはり、命は大切。死をまつだけじゃ生きる勇気もなくなるのではないかな。人は何か希望や夢などをもたなきゃいけない。生きることはすごいことだと実感しました。」

「生き続けることは、こんなにも素晴らしいのか。人の気持ちは生きることにつながるんだ。苦しむ。悲しむ。どちらも暗い感じがするけど大事なものは、それをどう思っただけでいいかな。どんな小さいことでも一生懸命に取り組めば、まわりが動く。そのことをたかし君はやり遂げた。」

「人の命は、すごい大切だということを改めて感じた。」

「生きる意味、命の大切さを知った。生きていてくれるのは、何よりも役に立っているんだと思った。」

「生きる希望、夢をたかし君は教えてくれたと思いました。生きることは改めて大切だ。命は大切だと思います。」

「命は、重くて尊くて大切。だから、ここに存在することに大きな意味があって、高い価値があって、深い感謝があり、すごいこと。私はそう思っています。私が、人生を命を大切に生きていくことが誰かの役に立つのかな？と思いました。でも、それで人のため

・になるのなら幸せなこと。」

「生きるという大切さを、改めて感じさせてくれたような気がしました。」

カテゴリー5. 悔いのない死

このカテゴリーは、主人公が最後には死を迎えるが、その死に対して「本人にとっては悔いのない死である」、「やすらかに死んでいった」、「やることをやったから死も納得した」、「死ぬとき泣かなかった」など死んだということそのものに着目するだけでなく、その前の生き方を通して、死そのものを本人も満足したであろうと死を肯定的にとらえている内容を表現していた。

具体的表現

「病気は、つらかったと思うし、治療もつらかったと思うけど、とても幸せだったんじゃないかな」

「生きる希望を捨てずに、精一杯生きたと思うから悔いはなかった」

「最後まで役に立つことを精一杯やっていたと思う、その人生が役に立ったのだから悔いのない人生だった」

「大人になる前に亡くなってしまったけど、こころは大人だと思う」

「大人になれなかったけど十分に思っているしことは、大人になれているし、最後まで精一杯生きられていたし・・・」

「死ぬとき、泣かなかったと思う、悔いのない人生を送っていたので、満足して泣かなかったと思う」

「悔いなし人生を歩んだと思う、一生の中で友達の大切さを知り、命の大切さを知った」

「死んだしまったときは、落ち込んでいるというよりは、みんなに幸せを与えて安らかに亡くなっていったと思いました、みんなのために何かをしたいということが最後にならなかったのではと思いました」

「自分が生きていることがみんなに優しくしていることだということがわかって、幸せな気持ちで亡くなっていったんだと思いました」

「たかしくんのおかあさんが、納得したというのは、きっとTくんがやることやったんだということで納得したんだと思いました」

カテゴリー6. 残された家族・友達の悲しみ

このカテゴリーは、主人公の死を通してその周囲の人々の悲しみやつらさを表現したものである。特に母親やクラスメートが、どのような思いだったかに思いをはせている表現である。「お母さんの気持ちが突き刺さるように悲しい」「お父さん、お母さんが自分を責めているのでは」「クラスメートもすごいショック」などと記述数は少ないが、残された周囲の人々への思いにも目を向け、言及しているのが特徴であった。

具体的表現

「たかしくんが死んだときは、大勢の人が悲しかったと思う」

「(死ぬときに)生きよう、生きようと少しずつ動き、そばで見ていたお母さんの気持ちが、すごく自分の心に突き刺さるやうにとっても悲しい気持ちが伝わりました。」

「クラスメートもTくんがなくなってしまうと、とてもショックだったと思う」

「たかしくんのお父さんやお母さんは自分の子どもが病におかされていることを知って、自分を責めていたと思う。誰よりもたかしくんを心配したり、思ったりしていたと思う。そのことはお母さんの涙に表れていたと思う」

「たかしくんが亡くなってしまったときに、お母さんが発した言葉、そこですごく泣きそうになってしまった。それほどお母さんが悲しい思いだったんだなと思いました」

「僕と同じ6年生の時になくなってしまった事を、たかしくんの母が話していたときに、泣きながら話していたのですごく悲しそうでした」

カテゴリー7. 支えあう人と人

このカテゴリーは、主人公と周囲の人々との関係性や関わりから感じたこと、考えたことを表現したものである。サブカテゴリーとしては、クラスメートとの関係に注目した

1) 友だちとの絆、ビデオの中でのある障害を持つ少女と主人公の出会いに注目した2) 人との出会いがもたらす希望・勇気の2つで構成されている。

1) 友だちとの絆

これは、友だちとの友情や友だちとの相互関係など注目している「友達っていいな」「たかしくんとみんなの友情」「友達がどれだけたかしくんを思っているか伝わってきた」「友達を一番に思っているから、友達にも尊敬される」などの内容である。主人公とクラスメートとの関係の絆を、生きていたときの様子からさらに亡くなった後にも存在する絆についてまでも言及し、友情や友達の意味へと発展している表現も見られたのが特徴である。

具体的表現

「クラスメートのみんなは、信頼でつながっているんだと思いました。」

みんなはたかしくんが大好きなんだと思ったし、たかしくんもみんなもきちんとつながっている」

「たかしくんもみんなに支えてもらっていい関係だと思いました」

「たかしくんとみんなは、強い絆があって支えあっているんだということがよく伝わってきた。友達っていいなって思いました」

「あんなにがんばったたかしくんの周りには、支えてきてくれた家族、友達がいました。友達も家族も、たかしくんがかけがえのない存在だったと思います」

「たかしくんが死んでしまっても、机など残して心の中で生きているとあって、なんかよ

くわからなかったけど、驚いたというか、心にぐっときました。(中略) クラスメートの人とは会えないかもしれないけど、たかしくんは、天国で見守ってくれていると思います」

「最初たかしくんが、元気がなかったのに変わったのは、クラスメートのみんなが必死でたかしくんを励ましていたから、だから、みんなとたかしくんの友情がものすごいんだと思いました」

「死んでしまったとき、クラスみんながもう一度帰ってきてほしいと言っていて、その言葉をたかしくんが聞いてくれたらいいなと思いました。みんながたかしくんを必要としていてすごいと思いました」

「たくさんの人に支えられ、学校に行くことができ生きて生きる希望を持ってしあわせに毎日を過ごしていたんだなと思いました」

「友達と練習しているときたかしくんはすごく輝いていました。それ見ていて、友達ってすごい力を持っているんだなと感じました」

「支えていた周りの友達や先生もすごいなと思いました。それは、当然かもしれないけど、たかしくんの気持ちがわかり、支えあって、たかしくんには不思議な力みたいのがあるんだと思いました」

2) 人との出会いがもたらす希望・勇気

障害を持つ少女とたかしくんの出会いが、相互に希望や勇気を与えたという2者の関係に関する記述とさらに「人との出会いは宝である」「支えあい、お互いのためになりあう存在というのがすごく大切」という人との出会いの持つ普遍的な意味にまで言及していた。

具体的表現

「生きる力っていうのは、自分から出てくるものだけど、そのもとになるのは友達や自分がやりたいこととかからだと思ったので、夢を持ち続けて友達とお互い励ましあったり、生きる力を分けてあげたり、もらったりできればいいなと思いました」

「あやさんと話したとき、少したかしくんの中で悩んでいることがとけたんだと思いました」

「あやさんにあって、今まで絶望していたのに、その出会いが生きる希望が出てきたので、すごいなあとと思いました」

「たかしくんはあやさんに会いたくて、あやさんは、たかしくんに会いたくて、あったら二人とも励まされていい経験をしたんだと思いました」

「誰かの手を借りて生きてそのことに迷惑をかけていると思う。その気持ちが勇気や希望、奇跡に変わると思う」

「ひとりの女の人に会って生きる望みをもらって、たかし君の心の中でも『生きたい』『生きるってすごいね』と思えるようになって毎日明るく生活していた」

「たかしくんは、がんばりすぎて、時に自分を追いつめていたところがありました。それを、たかし君の考えを変えたのがあやさん。二人の出会いは、奇跡であり、運命であった。たかしくんとあやさんが、お互いに話し合ったことでお互いの力になったと思います」

「人は、支えあい、お互いのためになりあう存在というのが、すごく大切だと思いました」
「あやさんと出会ったことで『夢をあきらめなければ、叶う』ということを教えてもらって生きる希望が、また出てきました。人との出会いは、宝で意味のあるものだと思います」

カテゴリー 8. 生き方を通しての贈り物

このカテゴリーは、主人公の生き方が、残された者や関わった者にどのような意味を持っているのかということについて表現していたものである。特徴的なのは、「目には見えないけど心の中に生き続けている」「みんなの心の中にいる」「形で表せないものをももらった」「死して、なお皆に希望を与え続けている」「たかしくんの存在がプレゼント」など形には見えないものとして心に残る、何かを与えられたという表現に特徴がある。

具体的表現

「みんなたかし君に形では表せないものをももらったと思います」

「最後まで希望を捨てずに『生きる』意思を持っていた。それだけで周りに勇気を与えているのに、死してなお、みんなに勇気を与え続けている。そこに感動した」

「12歳で死んでしまったけれど、いろんな人に与えた優しさ、希望は12年間よりすごいもの」

「周りの人もたかし君にいろんなことを教えてもらったと思う」

「いつまでも、希望をなくさずに生きたたかし君は、今はいません。けれどみんなの心の中に生き続けている。今もみんなを励まし、役に立ち続けていると思います」

「みんなにいろいろな『物』ではないけれど、残していつてくれた。たかし君は天国でもみんなの役に立っていると思う」

「目に見える存在ではなくなったことで、だけどずっとみんなの心の中で生き続けているというのに何か学ばせてもらったような気がします」

「たかし君ががんばることでみんなも命の重みを感じたと思う」

「このビデオをみたひと全員に何かすごいものを与えているんじゃないかと思いました」

「たかし君の存在がもうプレゼントだと思います」

「みんなの心の中に残るほどの人で、すごいのちの一つだったんだなって思います。たかし君に会ってみたいです。みんなと同じところに住んでいるたかし君に会ってみたいです（中略）自分も明日、また未来に向かって生きたって思っています」

3. フリーディスカッション

フリーディスカッションでは、スムーズな導入が図れるように次の3つのテーマを投げかけ、それをもとに各クラスで話し合いを持った。

1) たかし君のビデオから学んだこと、2) たかし君の人生は悔いがあったか、3) どうしてたかし君はあれほど人の役に立ちたいと思ったか、の3点である。

(1) ビデオから学んだことに関しては、たかし君の言葉や行動に対して「すごい」、「えらい」といった感銘する発言が多かった。また、自分ならそんなことは思いつかない、やろうと思っても行動に移せないなど、自分にはかなわない生き方に感動していた。

具体的な表現としては、「病気で辛くて大変なのに人の役に立ちたいってすごい」、「生きているだけで人に役に立っているなん言えるってすごい」、「にんじんを贈ったり、人形劇をしたり、自分なら考えもしないことを行動に移すたかし君はえらい」、「誰かのために生きるという気持ちで親や友達に何かしてあげて、そんな姿を見習いたい」などである。

(2) たかし君の人生は悔いがあったかに関しては、悔いがある・ないともに同じくらいの人数であった。この話し合いから見えたことは、たかし君の生きた12年間という人生だけに焦点を当てた子ども達は、たかし君は12年間を精一杯生きて、夢が叶ったから幸せで悔いはなかったと考えていた。しかし、たかし君の大人になりたいという目標や、生きているだけでいいといった願望に焦点を当てた子ども達は、亡くなってしまったらもうその願いは叶うことはないから悔いがあったと答えていた。

そして、話し合う中で「精一杯生きる」というキーワードが子ども達から何度も発せられた。

具体的な表現として「たかし君は精一杯生きたから、全力を出し切ったから幸せだった」「生まれた時に幸せの量はみんな同じだけど、その後の人生をどれだけ精一杯生きられたかで幸せの量が決まると思う」などである。

(3) どうしてたかし君はあれほど人の役に立ちたいと思ったかに関しては、恩返しの気持ちや、普通ではできない体験をしているからと考えていた。

具体的な表現として「みんなに迷惑をかけて色々やってもらっているから、そのお礼をしたい」、「重い病気になり沢山の人の助けられ、人にはない体験をしているからこそ、別な方向から見ることができる」などである。

45分の授業中、意見は止まることなく続き、話したい、自分の言葉で表現したいという気持ちで溢れている子ども達の姿を知った。また子ども同士が感じたことをお互いに語り合い、気持ちを共感できる心や能力を持っていることを実感した。

V. 考察

1. 小学校6年生のビデオ視聴後の記述内容からみた特徴

我々は、以前に小学校4年生を対象に今回と同様の教材を用いて Death-Education を実施している(研究代表：岡田洋子、平成13-15年度科学研究補助金 [基盤研究(C)(2)]，研究報告書2004年3月)。

4年生を対象に実施した先行研究では、ビデオ視聴後のカテゴリーは、「死の不公平さへの思い」「命の大切さの再発見」「生きることのすごさへの感動・発見」「生きる姿勢」「意図的な命の抹殺への怒り」が抽出されていた。

今回の6年生を対象としたビデオ視聴後のカテゴリーは、結果で述べた8カテゴリー「生き方に感動」「見習いたい生き方」「死の理不尽さ」「命・生きることへの再認識」「悔いのない死」「残された家族・友達の悲しみ」「支えあう人と人」「生き方を通しての贈り物」が抽出された。

今回の Death-Education に用いた教材は、同じドキュメンタリー番組「たかし君ありがとう」を同様に用いている。しかし対象者の最も大きな違いは、実施方法でも述べたように、小学校のカリキュラムとして実施している36時間で構成されている「いのちの授業」の一環として4時間の時間をとって実施したこと、対象を6年生で実施していることである。そこで、先行学習内容・経験も踏まえながら、6年生という対象の発達段階とあわせ抽出されたカテゴリーから、過去に実施した4年生との比較を含め今回の Death-Education の評価とあわせ6年生の特徴について考察を深めたいと考える。

今回抽出された8カテゴリーの中で第1カテゴリーから第4カテゴリーまでは、4年生のカテゴリーにも同様に表現されていた内容である。しかし、その中でも6年生と4年生の記述にどのような質的違いがあるのかについて検討を進めてみた。

第1カテゴリー「生き方に感動」では、6年生と4年生の感動体験の表現を比較してみると、6年生は感動の理由や主人公の姿勢・行動に具体的に注目し、記述している点に特徴があり、現実の自分と比較しながら「自分がたかし君だったら」とより自分に引き付けて、表現されている点の特徴である。Death-Education 純粹に主人公の生き方に感銘を受けると同時に、自分が同じ立場だったらこのように生きられるだろうかという形で相手の生き方を見つめていた。

第2カテゴリー「見習いたい生き方」では、サブカテゴリーで表われているように「モデルとしたい生き方」「どんな状況でも前向きに生きる姿勢」のような、自分がこれから先、病気になったときには、主人公のような前向きな姿勢・生き方ができる人間でありたいという思いや意思を率直に表現していた点の特徴である。それは、4年生に比べると自らの強い意思として強く表現されていた。これらは、自分が病気や障害を持ったときでも、このような生き方ができるという予期的学習にもなっていた。

第3カテゴリー「死の理不尽さ」は、4年生では、良いことをしても亡くなる人がいる、がんばっても死ぬということへの思いと同時に「人は死ぬ」という死への恐れや悲しいという思いが混在する形で表れていた。しかし、6年生では、死そのものへの恐れの実現は見られず、生きてくてもがんばっても、生きることができないたかし君の姿に「残念」「かわいそう」などたかし君の死を悼む気持ちが強く表現されていたのが特徴であった。このカテゴリーには、さらに生きてくても生きられず亡くなっていく子どもを思うと、健康なのに自ら命を絶つ人がいることへの強い憤りと命の大切さを表現し、そのような人たちにもたかし君の生き方を知らせたいという気持ちを含め表現している。命を粗末にすることへの表現は、4年生でも表現されていたことではあるが、6年生では、たかし君の生き方や生きられない者を知ること、命を粗末にすることを考えるべきというメッセージ性が強い印象を受けた。

第4カテゴリー「命・生きることへの再確認」は、4年生、6年生に同様な表現として記述されていたものであるが、4年生では命や生きることの大切さをあらためて感じた「発見」であったのに対し、6年生は「いのちの授業」全体も含め、主人公の生き方を通して人間が存在することそのものに意味があるなど、人間存在の本質・根源的側面までに言及する記述内容が増えており、小学校4年生から6年生という成長の様子が伺われた。

第5カテゴリー「悔いのない死」、第6カテゴリー「残された家族・友達の悲しみ」、第7カテゴリー「支えあう人と人」、第8カテゴリー「生き方を通しての贈り物」は、4年生では具体的な表現としてみられなかった内容である。これらは、6年生という発達段階が進んでいることや経験が増えていることとあわせ、シリーズとして生・死の問題に関する学習を進めていることが強く影響していることが考えられる。

第5カテゴリー「悔いのない死」は、ディスカッションの中でも取り上げられたこととも関連するため、記述内容にも反映するように記述されていたが、子どもたちは先に述べた「理不尽な死」を感じる一方で、生前の生き方を通して見たとき、死そのものを単なるマイナスイメージではなく、死そのものも本人も家族も精一杯生きたので満足して死んでいったであろうという死を、肯定的にとらえていたのが特徴的であった。これらは、第8カテゴリー「生き方を通しての贈り物」にも関連するが、本人は、亡くなったけれどその生き方を通して多くの人に残したこと、影響を与えたものがあったということに注目しており、これらのカテゴリーは、いずれも死が単なる終わり以上のものであることを感じ、生と死の連続性に目を向けているといえる。

第6カテゴリー「残された家族・友だちの悲しみ」は、主人公を取り巻く人々に注目している点で第7カテゴリーに見られたように主人公のみに注目するのではなく、主人公の死が周囲の人々（両親、クラスメート）にどのような思いや感情を引き起こしているかをビデオの中から読み取り記述していたのは、6年生だけに見られた特徴である。

以上からビデオ視聴後の記述内容の6年生の特徴を4年生との比較で検討した時、4年

生では主人公の生き方やがんばっている姿に注目し、感動し病気を持ちながらも生きること、生とは何かに注目していた。6年生では、それに加え第5カテゴリー、第8カテゴリーに見られるように死が単なる終わり以上のものであることを認識し、記述していたのが特徴であった。死を見つめながらも、生のあり方に注目していることが大きな違いであり、他者との関係や残された人の思いと本人を取り巻く人にも目を向けていることが特徴といえる。6年生が、他者の立場に立ちながら考えや思いを発展させていく広がりを感じた。

これらは、4年生から6年生への成長という影響以外に、今回の対象となった6年生が36時間という約半年にわたって展開される「いのちの授業」の学習内容の影響が考えられる。今回、「死の理不尽さ」への表現はあったが、死への恐れというものがほとんど記述には見られていなかった。これはこれまでの学習をビデオ視聴前に記述をしてもらった中に見られた「死は生物にとって自然なもの」「死は怖いと思っていたがそうではないこと」「死について考えるようになった」など、死についても様々な角度から学習している結果であったと思われる。このように生・死の問題を考えていく機会を持つことが、子ども達にとっては、相手の立場に立つ当事者性、現実の自分との比較、想像力の豊かさなど経験内容をさらに自ら深めたり、結びつけたり、広げたりして考え、感じていく機会となっていることが確認された。

第7カテゴリー「支えあう人と人」は、4年生では、ほとんど見られなかった記述だが、たかし君とそれを取り巻くクラスメートや家族にも視点を置き、その関係性に注目していた点が特徴であった。つまり、主人公を取り巻く友人関係や担任、家族との相互の関係について記述し、それぞれの働きかけや思いが他者へも影響を与えるという相互性に着眼しており、主人公の生き方そのものにも影響を与えていることを記述していた。ビデオでは、障害を持った人との出会いも描かれていたが、人との出会いが、お互いの気持ちや生き方、姿勢に影響をもたらすという普遍的な意味までを言及していた。

2. 知識と体験学習のバランス(同化と調節)

今回実施したDeath-Education に対して、感想のレポート記載・提出を願った。同時に感想や思ったことを伝えたり、自分と異なる考えに対して質問したりするなど、フリーディスカッション形式も導入した。45分の授業中、ストップすることなく発言が続いた。教材の選択等、準備段階から系統立てて学習が進行し積み重なっていることで、自分の意見を伝え、また他人の考えに耳を傾けて相互に影響しあったり、共感できる心や能力が開花していることを実感することができた。

ピアジェは、イメージ・概念を外界から取り入れ形成していく段階(同化)と、外界に応じて自己の行動シエマやイメージ・概念を変えていく段階(調節)の均衡がとれた状態、バランスのとれた状態を適応状態と述べている。社会環境が変わり、情報化社会に伴い一方的に押し寄せてくる情報量が増す中で、同化と調節のバランスを保ちながら物事を認識し

理解していくことは、難しいことである。それだけに、物事を健全に認知していくプロセスにおいて、重要となる。

今回、フリーディスカッションでは他者の意見を聞いて・・・こういう理由から他者の考えに納得でき「もっとも」と思うので、自分の意見を変える(例えばたかし君は悔いがあったろうか、無かったろうか)、あるいは自分はやっぱりこう考えるので変更しない、といったやりとりがみられた。

小学校6年生は、ピアジェの認知的発達段階でいうと形式操作の段階(大人と同じ)である。自らの体験がなかったとしても自分に置き換えて、推理・推測することができ、論理的思考が可能な時期と言われてきた。しかし昨今の凶悪な犯罪をみると、相手の立場になって考えたり、この結果を予測したりといった能力が機能しているとは思われない。社会が近代化し豊かになる一方で、人間は社会化する過程で大切な「生活体験」ライフイベントを失うというリスクを負っていることを認識し、それに伴う弊害をどのように補っていくか、家庭・学校・社会が一致して取り組んでいかなければならない課題と言える。

3. カリキュラム全体における単元「いのちの授業」の位置づけ・意義

生徒は、この「いのちの授業」を学ぶまでは、苦しんでいる子の立場になって考えてみるなど、相手の立場になって考えることをしてこなかったしできなかった、と述べている。さらにベタータイムでの学習は、今まで考えることがなかったテーマ、今まで考えていないことについて考えさせるものであった、と述べている。

単元「いのちの授業」として36時間とって取り組んでいる学校は、Death-Educationへの協力依頼に対してYesという返答がいただけなかった経緯から考えても例外であって、多くの学校は未実施状況にあると言える。

小学校6年生が「命の授業」を通して学び得ているものは、人間の生や死、いかに生きるかといった人間の根源に関わるテーマといえる。小学校入学時から死を通して「命」「生」について学ぶカリキュラムの導入が急がれるところである。

4. 生と死について学ぶ教育・社会の構築

死をタブー視し、子どもとの会話を避けてきたと言っても過言でない「おとな社会」、一方、凶悪犯罪の低年齢化といった社会を震撼させる痛ましい事件が、繰り返される昨今である。

小学校6年生が「命の授業」を通して学び得ている人間の生や死は、いかに生きるかといった人間の根源に関わるテーマであるが、しかし今まで考えることがなかったテーマであると述べている。小学校6年生まで考えることがなかったということに、驚きとともに、現代社会は、成長過程にある子どもにとってどのような社会なのか、あらためて考えさせる課題となった。

社会の変化により、成長過程で学ぶべき大切なもの、特に人間の根源にかかわる生・死の体験といった機会が必ずしも保障される社会ではなくなっている。かえって現代社会は、その機会が失われつつある社会と認識した方が適切であろう。そのような中、依然として従来からの学校・家庭教育が踏襲され、その狭間に悲劇の背景があるように思われる。社会の変化によって人間としての成長過程で不可欠な、どのような生活体験が失われているのか、それら失われたものを学校教育においていかに学ぶ機会を提供するか、どのような学びが必要か、今回の「いのちの授業」は、多くの示唆を提起している。

VI. おわりに

この研究に導いてくれたのは、看護師になったばかりのまだ何もできなかった私を、可愛い笑顔で励まし悲しい別れに涙させた、幼くして亡くなった子どもたちです。時代がうつり変わり、あの時代より人間が・命が大切に扱われない残念な時代となってしまいました。

しかし、あなた達が導いてくれたこの研究を通して、今も大人はもちろん、同年代の多くの子ども達が、命の大切さを実感し、いかに生きるかといった人間にとって最も大切なテーマに気づき、歩み始めています。

小児の死の概念発達に始まり、**Death-Education** をとおして、命の大切さに気づき、お互い尊重し合って生きていくことができるよう・・・あなた達を思い出しながら取り組んでいきます。

最後になりましたが、この度はA小学校長はじめ多くの先生・生徒さんの御協力を頂いて、特に大野睦仁先生には、お忙しい中を打ち合わせに足をお運び頂き、また「いのちの授業」に加えて頂き、私達にとって貴重な体験・学びの機会となりました。心から御礼申し上げます。

かけがえのない命・人生を、一人一人がかけがえのない尊厳を有する存在として生きていくことができる世の中であるために、今後の取り組みに活かしていきたいと思っております。ありがとうございました。

Ⅶ. 参考文献

- 1) 常葉恵子・岡田洋子・岡堂哲雄他、児童期における死の概念発達、聖路加看護大学紀要、第6号、31-41、1979
- 2) 波多野完治他、子どものものの考え方、岩波新書、1976
- 3) 波多野完治他、同上
- 4) 細井八重子、子どもに「死」をどのように教えるか、東洋館内出版会、1993
- 5) 岡田洋子、学童期にある小児の死の概念発達に関わる要因の検討、天使女子短期大学紀要、No11、21-35、1990
- 6) 種村エリ子、「死」を学ぶ子どもたち、教育史料出版会、2000
- 7) 石黒美佐子、麻意ね、死ぬのがこわいの、立風書房、2000
- 8) 大塚敦子、さよなら エルマおばあさん、2000
- 9) アール・A・グロルマン、重兼裕子訳、死ぬってどういうこと?春秋社、1995
- 10) E・キューブラー・ロス、アグネス、ダギーへの手紙、佼成出版社、2003
- 11) ローリー・クラウス・ブラウン、高峰あづさ訳、「死」って、なに? 文溪堂、1999
- 12) 及川和男、いのちは見えるよ、岩崎書店、2002
- 13) 芹沢俊介、子どもたちの生と死、筑摩書房、1998
- 14) マリー・ウィン、平賀悦子訳、子ども時代を失った子どもたち、サイマル出版社、1984
- 15) J・W・アスティントン、松村暢隆訳、子供はどのようにして心を発見するか、新曜社、2000
- 16) 生と死を考える会編、「生と死」を学ぶ、春秋社、1997
- 17) 岡田敬司、コミュニケーションと人間形成、ミネルヴァ書房、2001
- 18) H.W.メイヤ、大西誠一郎監訳、児童心理学三つの理論、黎明書房、1985
- 19) 柏木恵子他、発達心理学への招待、ミネルヴァ書房、2003
- 20) ジョージ・バターワーズ他、村井潤一監訳、発達心理学の基本を学ぶ、ミネルヴァ書房、2002

表1-1 単元「いのちの授業」

1. 単元構成と日程

1) いのちって何だ？

- 佐世保事件から、いのちの重さ、大切さを考える。
- ウェビングマップを使って「いのちって何だ？」を考える。

2) いのちは輝いている！

- 「電池が切れるまで」の詩と小児病棟のビデオ
- 「どんぐりの家」のビデオ
からいのちの輝きを考える。

3) いのちはつながっている！

- 「種まく子どもたち」「葉っぱのフレディ」「こいぬのうんち」「空の手紙」から、いのちのつながりを意識し始める。

4) いのちは尊い

- 聴診器を使っていのちの音を聴く。
- 3億分の1のいのちを映像資料で理解する。
- 妊婦体験を通して、いのちを生むことの重さを理解する。

5) いのちをたどろう

- 自分の成長記録をたどることで、自分のいのちを見つめる。

6) いのちのゴールは「死」？

- 「さよならエルマおばさん」「おじいちゃんは106さい」
から「死」について考えはじめる。

7) 死ってなんだ？

- 「のにつき」「ダギーへの手紙」の中で「死」はどう描かれているか知る。
- 身近な「死」を考える。

8) 「死」は、「生きる」ことを考えること

- 「100万回生きたねこ」から「死」と「生」が隣り合わせであることを理解する。
- ホスピス病棟にかかわる人の話を聞き、よりよく生きることの大切さを知る。

9) いのちの授業をまとめる

- 卒業を間近に控え、1年間の学びを凝縮したポートフォリオを作る。

表1-2 「いのちの授業」単元構成と授業時数

テーマ	時数	内容
1. いのちって何だ？	3時間	① 佐世保事件からいのちの重さ、大切さを考える ② ウェビングマップを使って「いのちって何だ？」を考える
2. いのちは輝いている！	5時間	① 「電池が切れるまで」の詩と小児病棟のビデオ ② 「どんぐりの家」のビデオ
3. いのちはつながっている！	2時間	① 「種まく子供たち」「葉っぱのフレディ」「こいぬのうんち」 ② 「空への手紙」からいのちのつながりを意識し始める
4. いのちは尊い	4時間	① 聴診器を使っていのちの音を聴く ② 3億分の1のいのちを映像資料で理解する ③ 妊婦体験を通して、いのちを生むことの重さを理解する
5. いのちをたどろう	3時間	① 自分の成長記録をたどることで、自分のいのちを見つめる
6. いのちのゴールは「死」？	3時間	① 「さよならエルマおばあさん」「おじいちゃんは106歳」から「死」について考え始める
7. 死ってなんだ？	4時間	① 「のにつき」「タギーへの手紙」の中で「死」はどうか描かれているか知る ① 身近な「死」を考える
8. 「死」は、「生きる」ことを考えること	3時間	① 「百万回生きたねこ」から「死」と「生」が隣り合わせであることを理解する ② ホスピス病棟にかかわる人に話を聞き、よりよく生きることの大切さを知る
9. いのちの授業をまとめる	4時間	① 卒業を間近に控え、1年間の学びを凝縮したポートフォリオを作る

表2 カテゴリー1：生き方に感動

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
1. 生き方に感動	1) 生き方のすごさに 圧倒 2) 自分よりも大人の 生き方 3) 自分にはかなわな い生き方	<ul style="list-style-type: none"> ・人の役に立ちたいと行動するすごさ ・自分の運命に背を向けず生きるすごさ ・優しく強い気持ちへの驚き ・希望を諦めないすごさ ・病気なのに他者を思う強さ ・生きているだけで人の役に立っているすごさ ・苦しくても生きようとするすごさ ・素晴らしい前向きさ ・他者のことを考え私・僕より一つ上の考え ・命のことをわかっていて私・僕より上 ・大人になれないと言っていたけど立派な大人 ・人の役に立ちたいという考えが大人 ・僕より2倍3倍も命や死について考えている ・心優しくて考えが一つ高い ・自分だったら自分のことで精一杯 ・自分なら人の役に立とうなんて考えられない ・自分なら視野が狭くなる ・自分なら自分を優先してしまう ・自分なら絶望する ・自分なら生きること忘れてしまう ・自分なら病気を治すことしか考えない

表3 カテゴリー2：見習いたい生き方

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
2. 見習いたい生き方	<p>1) モデルとしたい生き方</p> <p>2) どんな状況でも前向きに生きる姿勢</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たかし君のように人の役に立ちたい ・たかし君のように前向きに生きたい ・たかし君のように人を思いやる人になりたい ・たかし君のようにねばり強く練習したい ・たかし君のように友達を大切にしたい ・たかし君のようにコツコツ夢を叶えたい ・たかし君のように人に優しくしたい ・いじめ、病気、事故にあっても精一杯生きる ・病気になっても最後まで諦めない ・病気になっても頑張っている ・病気になってもできるとわかった ・病気になっても人の役に立ちたい

表4 カテゴリー3：死の理不尽さ

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
3. 死の理不尽さ	<p>1) 生きたくても生きられない生</p> <p>2) 命を粗末にすることへの怒り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・普通の生き方している人よりも生きてほしい ・こんなにいい人が早く亡くなるのが不思議 ・何も悪いことしていないのに神様はいじわる ・死んでしまって残念 ・頑張っても生きられなくてかわいそう ・どうして奇跡は起きなかったのだろう ・どうして病気にかかってしまったのか不思議 ・どうして12歳で亡くなるのか不思議 ・自殺する人にたかし君のことを伝えたい ・自殺する人は命を大切にしていない ・自殺や殺人する人はおかしい ・生きる気持ち、命を大切にしてほしい ・生きたくても生きられない人のことを考えてほしい ・自殺する人はバカだ

表5 カテゴリー4：命、生きることへの再確認

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
4. 命、生きることへの再確認		<ul style="list-style-type: none"> ・生きていて役に立たないことはない ・生きているだけで人の役に立てる ・やはり命は大切 ・生き続けることは素晴らしいこと ・人の気持ちは生きることにつながる ・あらためて人の命は大切 ・あらためて生きることは大切 ・命は重くて尊くて大切

表6 カテゴリー5：悔いのない死

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
5. 悔いのない死		<ul style="list-style-type: none"> ・みんなの役に立って死んだからよかった ・皆に幸せを与えて安らかに死んでいった ・やることやったから死も納得した ・幸せな気持ちでなくなった ・12年間すごく楽しんでいった ・治療もつらかったが、とても幸せだった ・生きる希望を捨てずに精一杯生きたと思うから悔いはなかった ・人の役になったし、心で大人になった ・最後まで役に立つことを精一杯やった ・悔いのない人生を歩んだ ・悔いのない人生を送っていたので満足して泣かなかったと思う

表7 カテゴリー6：残された家族・友だちの悲しみ

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
6. 残された家族・友達の悲しみ		<ul style="list-style-type: none"> ・お母さんの気持ちが突き刺さるやうにとても悲しい ・友だちも（亡くなり）すごいショック ・両親が自分を責めているのでは ・たかしくんにお世話になった人も悲しい ・死んだとき大勢の人が悲しかった

表8 カテゴリー7：支えあう人と人

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
7. 支えあう人と人	<p>1) 友だちの絆</p> <p>2) 人との出会いがもたらす希望・勇気</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達を一番に思っていたから、友達にも尊敬される ・クラスメートの励まし ・たかしくんとみんなの友情 ・支えているともだちもすごい ・友達に必要とされてすごい ・ともだちはいい ・皆にとって大切な存在 ・クラスメートもたかしくんを大切にしている ・みんなに愛されていたから ・皆にとっても楽しかった ・皆の心の中で生き続ける ・友達はすごい力を持っている ・友だちは信頼で繋がっている ・クラスメートは、心から思いやり、支えあっている ・強い絆で支えあう ・友達、先生、家族に愛されていた ・絶望した時に出会い希望をもてた ・出会いでお互い勇気付けられた ・出会いが生きようと希望になった ・出会い生きる望みももらった ・出会いが奇跡で運命 ・人との出会いは宝である ・支えあい、お互いのためになる存在が大切

表9 カテゴリー8：生き方を通しての贈り物

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
8. 生き方を通しての贈り物		<ul style="list-style-type: none"> ・目に見える存在ではないが、心の中に生き続けるもの ・みんなの心の中にいる ・形では表せないものをもらった ・死しても皆に希望を与え続ける ・ビデオを見た人に何かを与えた ・いろいろな人に与えたやさしさ ・周りの人も、自分も大切なこと教えてられた ・生きているだけで皆に感謝され、喜んだりされた ・たくさんの人が感謝し、尊敬している ・周りの人の人生にも関係ある ・みんなの命の重みを感じた ・存在が、かけがえのない存在 ・存在がプレゼント ・誰かの手を借りて迷惑をかけたという気持ちが希望、奇跡に変わる